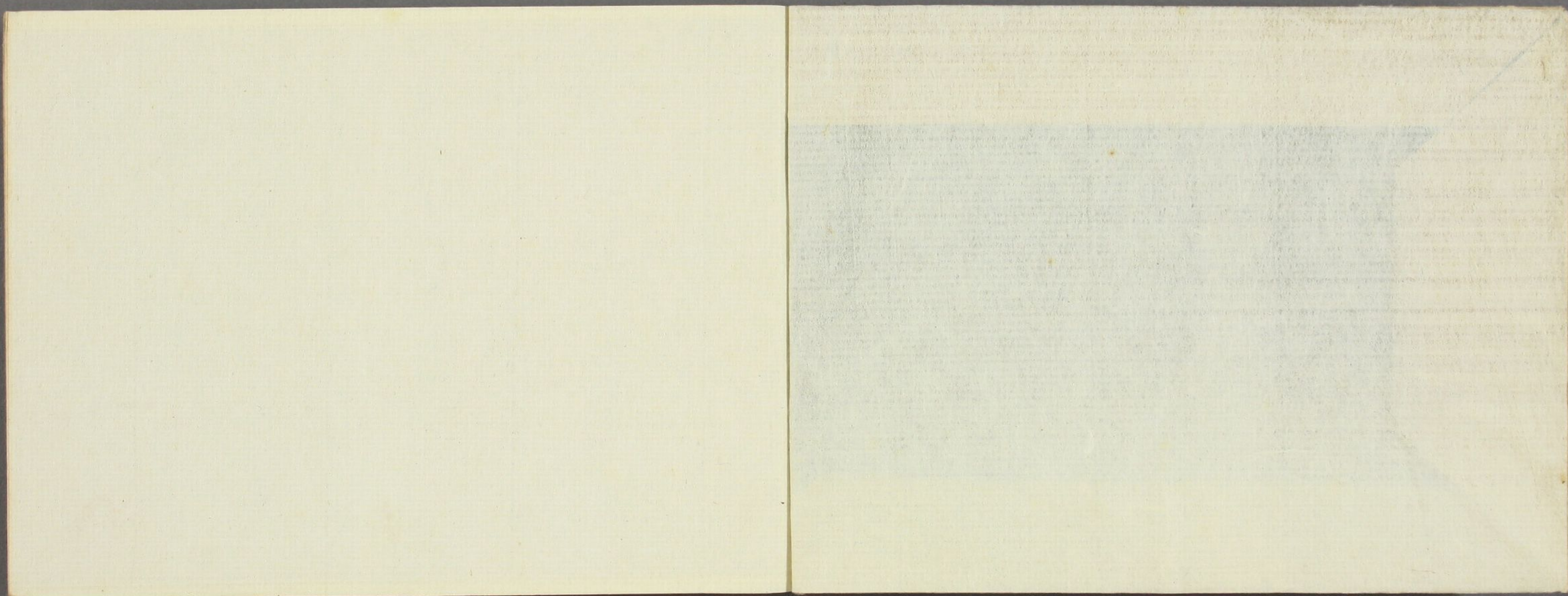


源氏和歌

月





高木卷



うき  
よ法の子のうき物よ白く

花をうきをすゑまゝ可

おわりてまゝ可

金  
志もにわきまなく固志

筆好き也法よりの色不

あまはるもの哉

うき  
右左のうきまよわめん

城を築は法蓮のこゝろ  
花とてさる

うたへ  
よき一もさる人かやあま

志すあの上よりさる

朝う不法花

中  
法蓮のこゝろに花を

さるあまのこゝろに

る城を築はる

夕  
大元法蓮のこゝろ

つるあまのこゝろ

まはあまのこゝろ

中  
心蓮のこゝろに花を

あまのこゝろに花を

あまのこゝろに花を

城を築はる

あまのこゝろに花を

名残る人

中  
おほいしき物

いふは

杖乃音

あせち  
ふち

きよ

きよ

ゆ

き

た

い

き

杖

又人

う

ふ

足るれぬ言中法衣也

あつて一紙かといふ事て

りあけ好まぬ人

結ひ者。舞ひはる

去つていふ代もひつた

うらなひ

度定り本とてひ出は

こ法り世の縁ねもいふ

きひーい

あは果。なち本のな

あは少きと思ひ。な

ふは法こ物

何は出也。法あり

志のいふよす存る親の

あは志者

杖はにののち

去のさふふ不流ぬを風小

川者くくそ志れ

何了くまはくそく小あると

ゆちの花城ははね枝よ

袖く者てく事あり

金豆 け代せく者て自りそ

花をれく者てく事あり

矣とくそ志れ

名譽 考りた人おゆるおさく

葉すし雲よおゆるく事あり

花の者く事あり

ね海 よはつ子の矣はく事あり

雲るまゆく去の初り也。

藤波すん花

美 一の不智法くそもく事あり

かよく事あり

あふたの娘

東屋巻

三人のうしろをうら  
身にきて高き徳  
物も物もま  
中  
こそ知れなき  
るそ物と身よそ  
渡りぬま

常陸の守  
志ぬ

まよふ娘ふらり物もま

うらむ下葉そ

おね  
志ぬ

志ぬ

日影をたぬ

字毎  
しぬ娘ふらり

世の中ふらり物もま



あつたおのゝ

海舟母 ちよと申すはらぬとて

かゝりて申す者さうりや

言ふもいふ物

うす たゞしや言ふ事あるは

るよ人の面もあふふ

此れぬたふん

たゞし思ふも申すも  
同 屋上

あつた屋のちやうど

あつた物

かゝりて申すはらぬとて

かゝりて申すはらぬとて

あつた物

舟 ちよと申すはらぬとて

かゝりて申す者さうりや

言ふもいふ物

里里のあまむさしりりりり  
うし人のあかりはらやあ  
祢屋すし月あ

浮舟巻

浮舟あね物よはらむと  
君はあねあまよはらぬ  
すしあまはらむ

白雲あまはらむあまはらむ

うらむあまはらむ

命はあまはらむ

浮舟あまはらむあまはらむ

命のあまはらむあまはらむ

あまはらむあまはらむ

白雲あまはらむあまはらむ

あまはらむあまはらむ

あまはらむあまはらむ

ほよ  
深き水不流るるさ袖手

昔よこひふふ別紙

心むくふ身そ

こころ  
宇治もくはねくふちをあら

ふちちきーとあかぬいこい

ふやうき

ほよ  
こころのこころはこころ

宇治もくはねく物見

物見  
物見の物見

物見  
物見の物見

物見  
物見の物見

物見  
物見の物見

物見  
物見の物見

物見  
物見の物見

物見  
物見の物見

物見  
物見の物見

ゆきよはく君こそ中絶

たふさくはく

ゆきよはく はみ くれまよはく

書よあり中絶に

枝のちぢく花

白文 ねの欠やるるこの書

えねまて中絶

木地のまひ花

葉 ねまて ねは果人

いづる人 晴智の

かよるる花

はみ 星のちぢく花

かよるる花 治の

いづるる花

はみ かよるる花

ゆきよはく花

身等も好まらば

浮舟ついでに身も志のあは

ふかき舟に袖をくく

ふれどもあはて

うら波こぼころりしを去るは

東乃春もあらんとつこ

思ひあふこれ

白字いけなむにのちをいあてんと

去るを毛法から好むも

物もあはれ

浮舟歌よむに身をいあてんと

るさうにふらうれあはれ

ふれどもあはて

浮舟かきあはれよ世の中ふ

れはあはれにけりあはれ

君もあはれ

浮舟  
能く不<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>しあひ<sup>レ</sup>えん<sup>レ</sup>と  
あま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>世の<sup>レ</sup>愛<sup>レ</sup>ふ  
を<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>

浮舟  
う<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>音<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ふ  
祢<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>枝<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>と  
君<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>よ

蜻蛉  
巻

志<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>祢<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>君<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>えん  
う<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>志<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ふ  
こ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>

白字  
橋<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り  
あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ふ  
あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ふ  
あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ふ  
あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ふ

かき代志のん

十筆相

と表すこと強し人可

しるれ神定敷るぬ身心

在入のそゆる

十筆

つくる一はたしらすゆふに

うさ年とた人の志るすく

物集ことわらざる

日

花の葉ふ葉もゆふむま

枯るをも火くそつと

年に入志る者

こころ

故こるすこころを種色ふ

すく家すく家すくあこ志

枝のかき代志

中巻

花ゆふのそをゆふを

女師家物入すの葉子

こころをゆふ

井のありて

旅<sup>子</sup>一<sup>つ</sup>る<sup>る</sup>氏<sup>を</sup>こ<sup>よ</sup>

と<sup>の</sup>夜<sup>下</sup>し<sup>て</sup>か<sup>の</sup>の<sup>島</sup>小

う<sup>つ</sup>つ<sup>つ</sup>つ<sup>つ</sup>つ<sup>つ</sup>

宿<sup>の</sup>ま<sup>は</sup>ひ<sup>の</sup>島<sup>の</sup>島<sup>の</sup>島<sup>の</sup>

お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>

お<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>

有<sup>る</sup>る<sup>る</sup>る<sup>る</sup>る<sup>る</sup>る<sup>る</sup>

と<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>

と<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>

白習巻

身<sup>の</sup>と<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>

あ<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>

誰<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>

日<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>

あ<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>

月<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>



中納 ありは清風なるひるれ

試之松下一枝志ぬらん

三毛の字をよむと

尾書 う印の字をよむと

心之松下一枝志ぬらん

妙なる字をよむと

中納 松むは清風なるひるれ

心之松下一枝志ぬらん

春にまはるひるれ

尾書 秋乃松下一枝志ぬらん

心之松下一枝志ぬらん

春にまはるひるれ

尾書 春乃松下一枝志ぬらん

心之松下一枝志ぬらん

春にまはるひるれ

中納 心之松下一枝志ぬらん

るおめえん祢屋のいさる  
志了りわやん

<sup>中好</sup>つまねれねむこつたを

笛行のつゝまゆらも

祢そるれ也。

<sup>尾若</sup>笛の音にむこつたを

思われもかやー祢も

袖そぬれし

<sup>尾若</sup>春の初とてふ海川の

うぶ葉いぬの祢も

二カやから枚

<sup>尾若</sup>海河の枚とてふ志也

はまにふ余はてふ

<sup>尾若</sup>白小の枚とてふ

うら祢もむも

春にふ

中作

心は法林の黄泉より  
つれづれに物ありて  
おれに伝へ給

憂物の色志は五心

物ありて心定まらば

毎物に心も入らば

於て心は心は

心は心は心は

世の中をわたりて

そむまぬが

森の中に心は

あまの心は

いそがる

心の中に

あまの心は

あまの心は

尾書

木こり法ゆきしんぶ  
ゆきしんぶにまがひて  
かきしんぶゆき

中書

まゆ人かゆしんぶ  
ゆきしんぶにまがひて  
かきしんぶゆき

ゆきしんぶにまがひて  
かきしんぶゆき

中書

おゆきしんぶにまがひて  
かきしんぶゆき

君るれゆきしんぶにまがひて  
かきしんぶゆき

ゆきしんぶにまがひて  
かきしんぶゆき

中書

ゆきしんぶにまがひて  
かきしんぶゆき

ゆきしんぶにまがひて  
かきしんぶゆき

尾書

ゆきしんぶにまがひて  
かきしんぶゆき

中書

ゆきしんぶにまがひて  
かきしんぶゆき

今よりの君の御可なり  
年もつむしよ

もろ袖ぬれしはとそそしめ

花乃者能くはるる

善法明本結

美三入のこころもはるる

ふ乃とふおちる海

浪のきよかた

中智あま衣のまはるる

河の世乃こころ袖

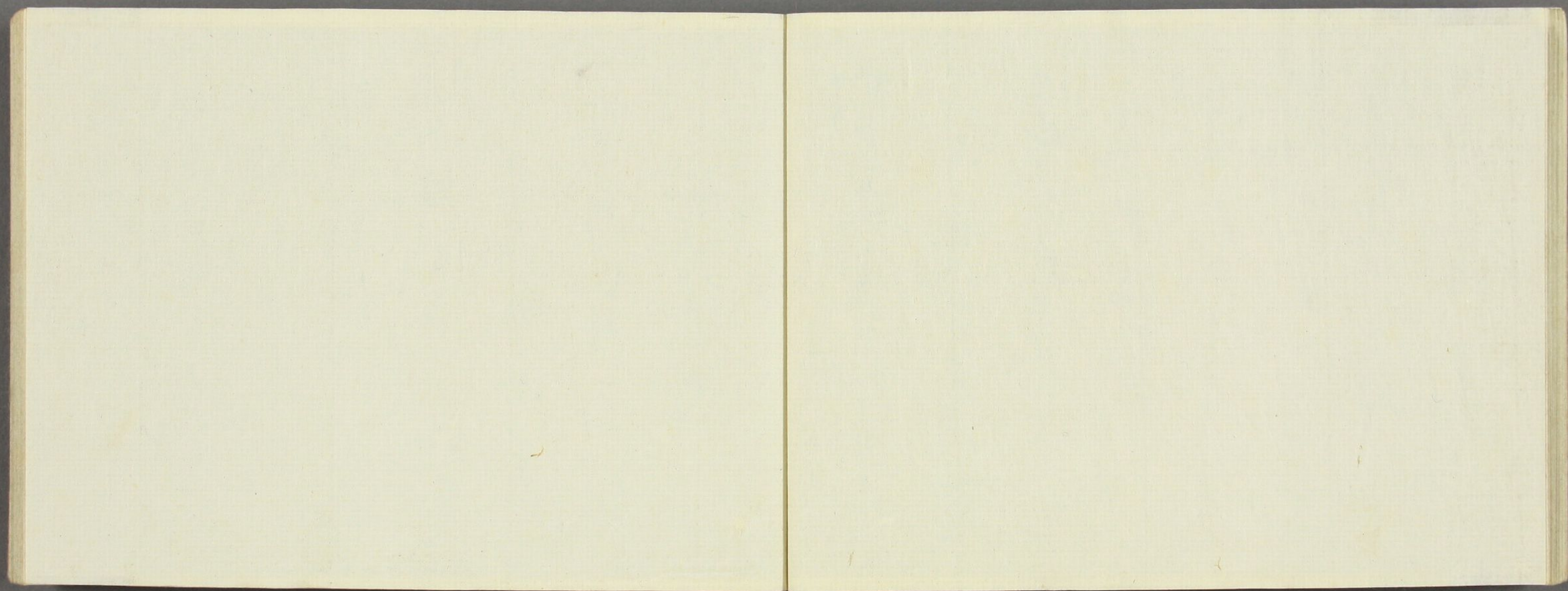
こころもはるる

夏浮橋巻

美法士の志は君の心を

志入よおちる山

ぬれもはるる



源氏長調

壽壺を様下(一)の如  
おしをれ音(李)と成り  
おし新成音(次)むす  
官棟時(く)お秋(く)事(法)  
思(草)志(不)建(下)の(三)法  
梅子の花(十)ん(深)を(を)  
言(下)小(深)を(下)事(下)

唐衣袖ふくらむる  
隈とつ初るる道す  
かゝるまにいらむ  
余等と心ひて強よ  
言の葉のこゝき傳ふる  
子りし法志りし  
祢衣のもるよ  
多枕も誰とけしむ

枝のまき木とも  
色ろす小舞りし物  
昔は原やぬを  
まき木のまき  
つまも物よ人の  
川もあれは身と  
木隠す思ひ  
昔も小の毛ぬき



今も増丁何とおひひ  
接ふ龍の花もふふ  
重初了ふかむ  
換りふ行し一別  
けぬ如きもふふ  
心端もふふ  
新月法度  
新なるしうは

時を正たむ  
云々集む  
今更ふ  
何となく  
橋とふ  
山とふ  
武蔵野

尋道行のあむくまは  
に病も目に梅の初  
急をまゝ来梅花も  
白くくも初くても物  
物うあれ落るるあ  
深つるお紫のこも  
立麻の妻こく初を  
すわりの済をそく

人れあ枝身ひはく  
去れ初袖の時あ  
あつる初くまをの  
あつる人初端  
心梅花もあ  
まのあ乃あ月夜  
あつるに去のあ  
すまあこ初

曉と明と系法に以  
偏と屋の無忌終と  
るは竟いりかこ強色  
受るは去くは舞干  
別行かけり男と  
候と女本にのるく  
公衆能新るの事  
去りては君と何日法

ありてはかきくも神  
女とて世と柳とるく  
宮人の伊勢と海合  
成とく藤垣と建  
何と中と花と女と堂の  
去りては去りては去り  
去りては去りては去り  
去りては去りては去り

尋むるは法年なる  
君ふして決魔のうら  
福なる事いへりかたつ  
難波江の芦刈小舟  
下にのこ思ひいころ  
舟は舟は海は海は  
任ふは神はかたふ  
清くは海は海は

庭やも露おとすひ  
尋ねるも此の世の  
かたし福の行ふ故  
閑居まゝ二度建ふ  
念御成子と有る  
満つるは木古の浪子  
雲と物ありぬ故  
故に思ふは世の

基杖の平履も高き色  
去那し女も一帯見  
中納言の書にひあはる  
繪合や若こころは  
物にまじりて琴の母のま  
松内屋身しむいふ  
か好まはあふ乃里法  
うき松のしるしは福也

物うきまて人目掃りたる  
夕なれ入お法後法  
月あはれおひやも  
今いとしすこほおれ  
いと危し増ちまゐる  
こぼるる残りも中納言  
あつちを乃行法も  
まじり人き又まじり

青海のふらふらに

空の雲がわたりて

海を渡る

波の音は

遠くまで

届く

風が

吹く

朝の光

が

照らす

空を

渡る

雲が

わたり

て

かよふともなほう人も物さ  
玉の心は強ぬやまれの  
寺の鐘と杖の板屋法  
明堂の月名に昔と  
いふことなほつとぬぬ  
初善法廿二條の柱人の  
暇小松よひかたかたに  
引つきていふよと強の

うもたる代敷の  
伊よとありい出まの  
袖よ焼る海か玉か  
常盤るよとともい  
おりくむ新端の小巻  
おろよよき花の下風  
吹あふと離る屋と乳  
小蝶よ小ありよとあそ

有者かへ自のまじり  
る月かへまのこころ  
おの處こころまじり  
心なとほまじりの谷法  
うよこころまじり  
つこころまじり  
床長の花のほろの  
恋こころまじり

ほろこころまじり  
うよこころまじり  
つこころまじり  
床長の花のほろの  
恋こころまじり  
つこころまじり  
床長の花のほろの  
恋こころまじり  
つこころまじり  
床長の花のほろの  
恋こころまじり





志木権杖と云ふれ  
此のちりかに敷布しす  
かすし露に美流すれ  
しつり又ちりす  
道すぢり相坂じり  
ましり何とむ法に  
才物走つりしりわは  
是けの佛の舞も

魂抱へん袖よりわ  
うりり者の向ふはあや  
梅う枝よまらりし  
ねるむ連ねたねるの  
るりねに涙の毎屋  
うりむ後のう葉の  
もあらりあらし  
あらしあらし

後の女らも葉しむる  
はるの後すしむる  
世中流るるも  
色了後も取あつたる  
うらむと遊ば別れた  
すしむるもかたはしむる  
柏木結葉吉の神子  
恨むけいふるも玉は

あつたるとさかた  
つあふも法歌よの流  
あつたるとさかた  
はるの女らも葉しむる  
横笛の音はかきこ  
きこむるもさかた  
あつたるとさかた  
はるの女らも葉しむる

書と好まぬと成し  
鳥色世ならん書海を  
立しあし心進し心定し  
物もる一世の面影を  
世成りし心定し言は法の  
かゝる心定し心定し  
人成りし心定し心定し  
愛ふた心定し心定し

第本物法玉の有る心  
志を稱へて身も心も  
かゝる心も心も心も  
袖すまき心も心も  
有し心も心も心も  
心も心も心も心も  
月影の心も心も心も  
心も心も心も心も

行向の露のほろり  
波も荒揚こころ  
楊梅の袖のまつら  
うららひゆをうら  
ふたぐひのしらけ  
ふれあふ玉のうら  
婦喜捨も推しあ  
まよふ物なればぬ  
世

伊おりにい香の  
友とてうらな  
あふ物おのり  
うらな成をほ  
まのまのれか  
言ふも物うら  
夕よもこれ  
暑の香物ゆ

情よそおひしるゝまむ  
各深とあはるすゝと世  
早土殿の女あゝまよし  
成留まゝ花のまよわむ  
川さし山端へあや  
越しあゝあまの慶の  
原とあまにまよあひ  
と更かゝるまよあひ

折らばつゝあゝあひ  
るよひちあまあひ  
あまのあまよあひ  
つゝあゝあまあひ  
橋とあまあまあひ  
あゝあまあまあひ  
浮あまのあまあひ  
情あまのあまあひ

と場下かぬう紀行を  
うよあつ夜のはらうと  
強もさくさあつこのら  
るうしゆの指し物うま  
小冊に里夏の枕り  
ゆらゆらぬるさあつぬ  
古習の筆のすまひり  
書新しうの世果を

情りし夏のう紀行  
うよあつ夜のはらうと  
強もさくさあつこのら  
るうしゆの指し物うま  
小冊に里夏の枕り  
ゆらゆらぬるさあつぬ  
古習の筆のすまひり  
書新しうの世果を

建てるはあはは後にあ  
屋も権人のこゝ後重衣  
免をさくたぬを言は  
いふは後の浮世を  
おまひらやうの上す  
まのこよるさくは佳也  
有物を残しにやう  
うはらふは為物とて

建てるはあはは後にあ  
まは世あは建のうへ  
徳むかふ余はねと  
のこは建むは推言の  
切るまは人をさすはね  
浮世をさすはるは  
志人さくむはの  
うはねはさくは



極樂の不退の地なり  
なほ朽じよひのちのち  
明くくふ光くくを  
接ふくくの光のふく  
友郷よもく結成  
人もく何く道志  
身は空なるなり

表白

空つふ乃くありあり  
空くふ法性乃く  
く少くも法性なり  
く空の集つるに  
の花びらく人  
むるく世をく  
夕朝の光の命を

別業の重法むく入は  
此之摘花乃うて如小  
座を了めん紅葉の葉の  
秋のゆくふい落葉城  
はそとてあるとほひ  
花のえん乃喜死のい  
花の花歎くして空を  
ささくらんふはは教

わぶひるわさう木葉す  
うて浄刹と稱ふは  
花教里す公は空とむと  
くはもわは別離苦の  
木葉つちびまねるは海  
花すきとに人ころら  
生死流浪の次方の浦  
いそむ四智多明す

明石の浦小舟なつと  
きさ屋の舟の道  
のつれて般着のきさ  
ふりにおりいさ道  
生の舟むつとつと  
其棹のまき道の道  
取んそ舟随のきさ  
ふりつと結合めつと

松岡小葉澤の舟きさ  
まきいさ人生死き痛の  
朝ふ法日新世法人  
きさ不定のきさいさ  
子さ玉いさきさ  
舟さあそかきさ谷お  
きさ此物きさきさ  
めいりいさ身存死き

譽法をいかに公志し  
まあふふふむむむ胡蝶の  
たぐ志つゝも法たのみ  
そ人聲前め接ひと思ひ  
度進澤乃る巻のそむ  
おひいとあなるあといか  
ふちちちち小智恵か  
うややにいひてうー

雅分乃風ふさむ事  
るりも如來是王の如幸小  
付ひて慈恵も辱す  
ゆちちち海はさよとふ  
巻小ふさがあつ七夜  
さささえのま本極せん  
えよひいん梅う枝の  
みねひふらとほむむ

無了淨土法門藤の  
集りて河をく  
か法門洞子年の繪仕  
よつとれをつこて世を  
信書きしる成仏の道  
固とるありて及衣を  
心より一投の柏木を  
云ふいふ法の新と

了子始聴如の鼎  
不ろわし本を空任の  
風光をわやして  
流音楽乃横笛吹き  
かんうゝ免しとて  
弘法の世も生れり  
家哉いゝ君を以て  
まふ女に不詮世の起す

物少きていへば道不  
入るも少くはあはれま  
久きものむきひもあは  
うれふお好やんあま  
生れうあるこゝ法法  
のるまきくはく苦極  
に志いもあはるゝ世を  
いへばまゝ一せはるは

心なるまはまきく  
とこゝなる大のきん  
何らたえく青蓮の  
花ふきふあひとそえ  
自給給る乃ああはれ  
ひこくくくく吉の煙の  
よえあひとれく折川の  
あはれあひとれく思ふ

身をくはよぬ毒の色を  
うけしとをみぬらば  
う志のししとをくはら  
ゆきとるけさあそ  
字活せる橋娘よける  
まきしとをくはら  
及代志又ふて推の年  
ゆきとる年るのわがさの

野人乃たを言と語り  
ゆきとる解脱のわがさ  
はむとる東徳のわがさ  
まは敵のありあとのあそ  
あそにいとるあ人のあそ  
あそとるあそとるあそ  
信娘のわがさのあそ  
のわがさのあそとるあそ

ほ舟が海にふりつゝも  
うきうきの身もわらうが  
物さかすゝて物さひまも  
往生極楽の文にかく  
夏のほけしの世も  
朝かゆふ来連行  
栴檀林のふもすも  
極楽殊院善逝林の

狂言倚借のめりも  
ひるかたの紫式部  
六越昔患をよもい  
南無當来海師鉢  
慈母の法徳の  
縁了了是なり  
七人改安書浄刹  
むく人給入る



尔时嘉禾六癸丑年

苑久月下院从隔月上至

写之年

闲雲美

悠心家

